■画一的大量教育を行ふ学校

社会にはいろいろな職業があり、それに従って個性や能力が期待されてゐます。所が、今の学校教育はカリキュラムの編成から教室の運営、教へ方が画一的で、個性を育てる所(ところ)かこれを押潰してゐるのが現状です。前にも述べましたやうに、学校そのものが画一的大量教育を行ふ所に存在理由があるのですから、個性を育てる事を期待するのが無理といふものでせう。然し、昔の学校には個性があったから救ひがありました。今はそれがありません。

司馬遼太郎氏は大阪外国語学校の出身ですが、それは氏の受験の年に限って試験科目に数学が無かったので受験したのださうです。「その所為(せい)かこの年の学生には異才が多かったやうに思ふ」と何かに書いて居られました。当時の入試科目は、多くが「国語、漢文、英語、数学」の四科目でした。「入試に数学が無かった」といふたったこれだけでも学生の個性が多様化し、豊かになるのです。

私の学んだ大東文化学院に至っては、入試科目が「漢文」と「作文」の二つだけでした。永年に亘って日本人の精神を培って来た漢学を振興する為に、国会が満場一致で可決し創設した学校であったからとは言へ、これは実に思ひ切った英断だったと思ひます。その所為で漢文だけは揃って出来る者ばかりでしたが、その他の能力に至っては実にばらばらで多彩でした。だから、学友から受けた裨益(ひえき)には大きなものがありました。

これと対照的なのが東京と広島にあった高等師範学校です。入試科目は国語・漢文・英語・数学の外に物理・化学・地理・歴史などがありました。私などはこれを聞いただけで敬遠してしまひました。だから「こんな学校を受ける人ってどんな人だらう」と驚異の念を懐いてゐたものです。

又別に私立で物理学校といふ面白い学校がありました。入学試験が無いから誰でも入学できました。その代り卒業する事は実に難しい学校でした。「物理学校の学生です」と言っても誰も特別の眼で見る事はありませんでしたが、「物理学校の卒業生です」と言へば、誰でも一種畏敬の念を懐いてこれを眺めたものでした。